

333 Typical Endometrial Carcinoma における分化度と基底膜及び間質部の超微形態学的研究

関西医大

神谷敬雄, 田中一朗, 岡村芳郎, 森本義晴,
中島徳郎, 榎木 勇

〔目的〕子宮内膜癌の大部分を占める Typical Endometrial Carcinoma は, 組織学的に高分化型 (G1), 中等度分化型 (G2), 低分化型 (G3) に分類されている。内膜癌細胞の超微形態は極めて多彩で, それぞれの type による特徴的な細胞形態をとるとは限らない。今回, 我々は組織学的に Typical Endometrial Carcinoma と診断された試料について, 基底膜と間質部を中心に超微形態学的検討を試みた。

〔方法〕Typical Endometrial Carcinoma と診断された試料を, 2.5% グルタルアルデヒド-1% オスミウム酸二重固定し, 型のごとく超薄切片を作製, H-500 及び H-600 透過型電顕にて観察した。

〔成績〕高分化型腺癌 (G1): 基底膜の三層構造は比較的保たれているが, 腺癌細胞の突出により歪曲している。間質細胞は減少し, 圧迫により極めて細長い紡錘型を呈しているが, その核は大きく不整でクロマチンも豊富であり, 細胞内小器官も比較的多い。中等度分化型腺癌 (G2): 基底膜の三層構造は不明瞭となり, 部分的に断裂し, 腺癌細胞が基底膜を破綻する像も認められた。間質には膠原線維が増加し, 間質細胞は一層減少し, 形は不整となり時折 cell debris も認められる。核は不整で小型となり, 細胞内小器官も高分化型腺癌よりも疎となる。低分化型腺癌 (G3): 基底膜は極めて不明瞭となり, 腺癌細胞は極性を失って増殖し, 間質細胞はその間隙を埋めるように小型となって存在する。cell debris は各所に認められた。

〔結論〕Typical Endometrial Carcinoma は, その未分化の程度に応じて上皮細胞のみでなく基底膜および間質細胞も変化し, 病巣進展機序の一端が解明された。

334 エキシマ・ダイ・レーザーによる子宮頸部の光線力学治療の基礎的研究

佐々木研, 杏雲堂病院

杉下 匡, 木島武俊, 坂本 優, 室谷哲弥,
杉田道夫, 天神美夫

目的: エキシマ・ダイ・レーザーによる癌の光線力学治療は, わが国において早田, 加藤らにより肺癌分野に優れた成績をあげている。しかし婦人科領域では全く利用されておらず特に子宮頸部の初期癌または境界病変に使用するための基礎的データを得ることを目的とした。

方法: 剔出子宮を臓器保存法で生存させ, 子宮動脈より hematoporphyrin-delivative (HpD) を注入頸部の扁平上皮および円柱上皮各領域に 5 Jue1 のレーザー光を照射, 照射部位の組織を採取し HpD 蛍光量を分光計にて測定した。次にレーザーのエネルギー量を替え 5, 10, 15, 20 Jue1 で照射し最もよく組織を破壊したエネルギー量を調べた。

成績: HpD 注入前の血液中のポルフィリンの自家蛍光は $337 \mu\text{g/gw}$ であり, 人工血液による 1 時間の灌流後は $58 \mu\text{g/gw}$ に低下した。HpD の注入により $489 \mu\text{g/gw}$ に増加した組織内 HpD も 3 時間後には $80 \mu\text{g/gw}$ 台に安定する。レーザー照射群ではさらに HpD は $32 \mu\text{g/gw}$ に低下し, 非照射群の control と比較して明らかなレーザーによる HpD の消退を証明した。またエネルギー変換の結果, 採取組織の HE 染色標本による観察において, 組織に最も著明な破壊像を示したのは 15 Jue1 以上であった。

結論: 今回用いられた剔出子宮は全て子宮筋腫であるため検索上皮は全て正常であった。HpD 注入以前に血液中のポルフィリン量が $337 \mu\text{g/gw}$ であることを充分考慮した上で HpD の注入量を計算すべきであることと組織内安定 HpD 量が注入後約 3 時間で $80 \mu\text{g/gw}$ 台になることが判明した。さらに有効レーザーエネルギーは 15 Jue1 以上を必要とした。また肺癌領域に用いられる静注法と異なり動注法の量的問題にも重要なデータが得られた。